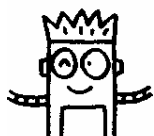


やよいじだい

## 弥生時代の人々は、どんな家に住んでいたの



たてあな住居に住んでいたが、中を区切って使うようになってきたんだよ。

弥生時代の家は、縄文時代じょうもんじだいと同じように、たてあな住居が中心でした。しかし、中のようなすは、大きく変わったようで、5世紀後半ごろから、今の家のように、台所・居間ねま・寝間などに区分するようになりました。

### 台所がおくにつり、真ん中は居間になった

家の中央部は、4本または5、6本の柱にかこまれた土間です。縄文時代には、土間の真ん中に、火をたく炉ろがありましたが、しだいに、入り口と反対がわのおくに、炉がうつってきたようです。炉のまわりは、料理をする台所で、食料を貯蔵するあなもあります。台所がおくにつったことで、土間の真ん中は、家族が食事をしたり、団らんしたりする居間になりました。

### 居間のわきは寝間

居間のわきの、柱とかべの間は、わらをおいたり、敷物しきものをしいたりして、寝間にしていたようです。寝間を床から10センチメートルほど高くしてある遺跡いせきや、かべをつかって寝間を区切ったらしい遺跡も、見つかっています。

### 入り口近くは物置・作業場

入り口がわの片方のすみは、米づくりの道具などをおく、物置にしていたようです。また、入り口の近くは明るいので、道具の修理などをする作業場にしていた、とも考えられています。

